

2024年度 マネジメント学部
一般選抜 A 日程問題

国 語

2024年 2 月実施

出 題 科 目	ページ	解答番号
国 語 (100点)	4 ～17	1 ～ 25

注 意 事 項

- 1 選抜開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見ないこと。
- 2 問題は 4 ～17ページである。
- 3 選抜中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 4 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入し、マークしなさい。
 - ① 選抜番号欄
必ず選抜番号（数字）を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしなさい。
 - ② 氏名欄
氏名及びフリガナを記入しなさい。
- 5 必要事項欄及びマーク欄に正しく記入・マークされていない場合は、採点できないことがあるので注意すること。
- 6 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、

31

 と表示のある問いに対して⑤と解答する場合は、次の(例)のように解答番号31の解答欄の

5

 にマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄
31	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

- 7 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。

国

語

(
解答
番号

1

～

25

)

I 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

象徴に関わる行為のなかで「名をつける」ということほど重要なこともまたない。子どもに名をつける。それは生まれたばかりの、まだ人とも呼べないものに象徴的な産着を着せ、その子を系譜的な関係に繋ぎとめると同時に、言葉によるコミュニケーションのレン^⑦サのなかに座を与えることでもある。そのとき、誰が名をつけるのか、どう名づけるかは、ともに大きな意味をもち、その名で呼ばれることになる存在の在り方を左右する。

ただ、子どもの名づけは必ずしも恣意的なものではなく、多かれ少なかれ社会的な慣習に従っている。その限りでは名づける側は、「全能性」を振るうということにはならない。けれども、別の場面では名づけはほとんど「存在」を与える行為になる。名前がなく、呼ぶことさえできないものは存在しないに等しい。名を与えられることでもの形をもって存在し始める。名を与えるとは、^A言葉の支える「存在」の秩序のなかに場を与えることでもあるのだ。だから、たとえば聖書でも名づけることは神の役目だった。このことはまた、言葉の根本的な力にも関わっている。「光あれ、すると光があった」『創世記』。この呼びかけは神による召喚を意味しているだけではない。光を呼び覚ます。だがそのためには、まずそれが「光」と呼ばれなければならず、そう名指されてはじめて光は召喚しうるものとなる。だから名づけと召喚は同時になされ、それが存在への召命、つまりは創造行為となる。

「アメリカ」という、いまの世界でもっとも有名な名前がある。これは誰もが知るように、コロンブスの^①ボウケンによって「発見」された大陸に、ヨーロッパ人がつけた名前だ。当初はそれは、ヨーロッパ人にとって見慣れぬ「人種」の住む、しかし魅惑に満ちた未知の天地を指していた。けれども、やがてそれはヨーロッパ人が移り住む「新世界」を指す言葉となる。「a」つまり、すでに存在していて「発見」されたものにつけられた名前は、いつの間にか、そこに新たに作り出される世界の名前になったのである。そのとき、命名はひとつの設定行為へと変化する。

そのように設定されたものとしての「アメリカ」は、一六世紀以前にはまったく存在しなかった。にもかかわらず、たとえば考古学が「アメリカの先史時代」などを語って憚^{はばか}らないのは、この名の示す内実のすりかわりに無頓着だからである。「b」けれどもまた、この名が何かを設定したということも、名前が大地（大陸）の存在にもたれかかっているために見えるにくくなる。そのうえ、ひとたび名前が流通しだすと、人はその名のもとに物事をすでに存在するものとして語るようになり、名づけの重大さは忘れられてしまう。とりわけ、その名づけが何をなし、何を創始したのかは、名前の流通によってかき消される。

正確に言うなら「アメリカ」という名は、ドイツの地理製作者マルティン・ヴァルトゼーミューラーがある書物のなかで（二五〇七年）、見出されたのは新しい大陸だと言明したイタリア人探検家アメリカゴ・ヴェスプッチの「功績」を記念して、「新大陸」を彼の名にちなんで命名することをテイ^②ショウし、それが受容されて以来使われるようになったものだ。ところがこの名づけは単なる名づけにはとどまらなかった。「アメリカ」という名前は、それ以前にあったかもしれないその他のあらゆる名前を抹消してしまった。「c」だからいまではわれわれは、一六世紀初頭に「アメリカ」と呼ばれるようにな

る以前のあの地の名前を知らない。そういう抹消の効果を、この名づけはもったのである。

もちろん、かの地の先住民は大陸を総称する名をもたなかったということもありうる。つまり、「大地」とか「世界」といった呼び名はあっても、私たちの生存の舞台となる世界の広がりそのものを、ひとつの名前で呼ぶ習慣はもたなかったかもしれないということだ。「d」けれどもその大地を「発見」し、名づけることで掴み取ろうとする人びとが、この世界の外からやってきた。彼らはその大地を「アメリカ」と呼び、そこに住み着き、やがて故地のヨーロッパに対して自分たちを「アメリカ人」と名づけるようになる。

^B誰が「アメリカ人」だったのか。それはこの地に元から住んでいた人びとではない。彼らはヨーロッパ人の最初の誤解に基づいて「インディアン」（あるいはラテンアメリカでは「インディオ」と呼ばれ、その後も訂正されることはなかった。もとより彼らは「アメリカ人」ではなかった。それは「アメリカ」が、「古いヨーロッパ」を脱出した人びとの「約束の地」だったからであり、新しく開かれる世界だと見なされていたからだ。「アメリカ人」とはこの土地に住んでいた者のことではなく、この土地をそう呼ぶことで「アメリカ」に対する権利を主張する人間たちのことだったということだ。

「アメリカ」の名づけは、たんに「発見」された陸地の命名にはとどまらなかった。それは、それまで存在したひとつの世界をまるまる押しつけて消滅させ、^C「新世界」を設定する行為でもあったのだ。そしてこのとき設定された空間は、基本的に制度的な性格をもっていた。というのは、この名づけにとともなう一世界の創始が、土地の所有権の設定を基盤にしていたからだ。土地の私的所有という観念をもたなかった先住民は、はじめからこの権利の外に置かれ、しだいに住む土地を追われていった。そしてその後も、大洋の彼方から持ち込まれた法制度を理解しない彼らは、土地の正当な所有者にならず、自分の土地に居ることそのものがいつの間にか「不法占拠」とみなされて、ついには保留地以外に住処をなくすことになったのである。要するに、「アメリカ人」とはヨーロッパから移植された制度に従って、法行為の主体たりうる人間のことであり、その制度空間になじまない人間が「インディアン」だったということだ。「e」

土地を追われて、農耕や牧畜もできなくなった者たちは、都会にまぎれこんで小さな仕事を得、細々と生きるしかない。たとえば、読み書きができれば弁護士のもとで代書人になる。けれども代書人は、土地の登記書類をルーティンのように筆写させられる。そんな仕事は「できればたくない」。そうして、仕事をする意志をもたないことで業務をテイ^①タイさせ、居るだけで厄介者となり、そのことでエン^②カツな秩序に不安を作り出し、危険な者として刑務所に入れられる。だが、そこも法的秩序の場所であるかぎり彼の居場所ではなく、ついには存在そのものを消し去るほかなくなる。それがハーマン・メルヴィルの描き出した『^(注)バートルビー』の主人公の運命ではなかったか。

そこに「アメリカ」という名で設定された新しい空間の特質が端的に示されている。それは所有の権利を基にした法的空間ということだ。フロンティアの西進は、「インディアン」をその生活圏から駆逐しただけではない。そこで進行していたのは、**X**を、登記簿上に置き換えること、法的文書に記載され取引される所有権の対象へと置き換えることであり、自然の土地を「不動産」へと転化することである。つまり「アメリカ」とは、登記簿化さ

れた一世界のことなのだ。

にしたにおさむ
(西谷 修「名づけと所有」)

(注) バートルビー……アメリカの作家ハーマン・メルヴィルによる寓話的な短編小説(一八五三年発表)。法律事務所に雇われた青年バートルビーは、やがて一切の仕事を温和な口調で拒否するようになり、ついには刑務所に連行され、食事を拒んだまま息絶える。

問一 傍線部⑦、⑧の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は⑦―1、

①―2、⑨―3、⑤―4、④―5。

- ⑦ レンサ
- 1
- ⑤ ④ ③ ② ①
- 外国の状況をササツする。
会長のホサを務める。
江戸幕府によるサコクの政策。
シサに富んだ言葉。
長いあいだ音サタがない。

- ① ボウケン
- 2
- ⑤ ④ ③ ② ①
- ボウシを被る。
物語のボウトウ。
インボウを企てる。
ボウキヤクの彼方。
ジンボウのある指導者。

- ⑨ テイショウ
- 3
- ⑤ ④ ③ ② ①
- 校歌をガツショウする。
関係者によるフショウジ。
高額なケンショウ金がかかる。
フショウの弟子という評判を覆す。
戸籍ショウホン。

- ⑤ テイタイ
- 4
- ⑤ ④ ③ ② ①
- タイシン構造の建築。
職務タイマン。
お家のアンタイを願う。
ケイタイ用の小さなラジオ。
紙飛行機のタイクウ時間を競う。

- ④ エンカツ
- 5
- ⑤ ④ ③ ② ①
- 群雄カツキョ。
グライダーがカックウする。
カッパツに動き回る。
内心のカットウ。
真実を鋭くカッパする。

問二 次の一文を本文中の「 a 」 「 e 」 に入れるとしたら、どこに入れるのが最も適當か。後の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。
解答番号は **6**。

それは彼らにとって限定できない、指定する必要のない、逆に彼らを包摂する世界だったのだから。

- ① 「 a 」 ② 「 b 」 ③ 「 c 」 ④ 「 d 」 ⑤ 「 e 」

問三 傍線部 A 「言葉の支える〈存在〉の秩序のなかに場を与えること」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適當なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は **7**。

- ① 名前がなく呼ぶことさえできず、そのため存在しないに等しいとされているものに対し、ふさわしい名前を与えようとする。
② 命名する者のもっているさまざまな思いを背負ったものとして、それまで存在しなかったものを秩序のなかに浮かび上がらせる。
③ 世界の秩序を作り出すという言葉の特質を踏まえ、名づけるという行為を通して、その秩序を維持し支配していこうとすること。
④ 秩序のなかに存在していたものに、その存在のあり方を左右するような新たな名前を与え、その存在を象徴的なものにしていくこと。
⑤ 名をもつもの同士の関係によって作られる一つの世界のなかに、名づけることで意味や性格を与えたものを、位置づけ存在させること。

問四 傍線部 B 「誰が『アメリカ人』だったのか」とあるが、ここという「アメリカ人」とはどのような人間のことか。その説明として最も適當なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は **8**。

- ① 古いヨーロッパを脱出し、もはやヨーロッパのことを意識することなく新天地で生きている人間。
② 自分たちの移住先がアメリカという名の土地であると信じ、その土地で生きる権利を主張する人間。
③ 「約束の地」を探しあぐねた末に、たまたまたどり着いた場所を「約束の地」だと思いこんでいる人間。
④ アメリカ人と名のる先住民の存在をないがしろにし、そうした先住民たちを押しつけて土地を奪った人間。
⑤ 自らを主体的に「アメリカ人」だと名乗るようになった、ヨーロッパ人から見れば見慣れぬ「人種」の人間。

問五 傍線部C『新世界』を設定する」とあるが、筆者はこの『新世界』についてどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次の

中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は **9**。

- ① 登記簿上に設定された世界というべきものであり、それを保証しているのは恣意的に作られた法的秩序である。
- ② ヨーロッパ人にとつての「約束の地」であり、彼らが先住民との闘いの末にやつのことで手に入れた世界である。
- ③ 先住民たちが土地の所有権を放棄した後、そこに勝手に住み着いた者たちが「アメリカ人」を名乗ることで成立した。
- ④ 現実と無縁な架空の場ではあるが、そこには「アメリカ」という名で設定された空間の特質が端的に示されている。
- ⑤ それまで別の固有名で呼ばれていた場に、新たに「アメリカ」という名を与えることによって成立した世界である。

問六 空欄 **X** に入れるのに最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は **10**。

- ① 人間の生存を拒む自然の土地
- ② 名づける必要もない所与の空間
- ③ 外部の人間にとって魅惑的に感じられる土地
- ④ アメリカ人にも先住民にも無縁な広漠たる空間
- ⑤ 農耕も牧畜もままならない荒涼とした自然の大地

問七

筆者の考えに合致するものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は

11。

- ① アメリカという国の真相に迫るには、その名前に惑わされることなく、その国がどういう土地に存在しているかということに注意を向ける必要がある。
- ② アメリカに移住した人びとは、先住民たちを「インディアン」と呼び、彼ら一人一人が所有していた土地を取り上げたあげく、自分たちの専有物にしてしまった。
- ③ 命名とは言葉の根本的な力にかかわる行為であり、何事かを存在させそのあり方を設定することでもあるが、アメリカの成立にはそうした事情が表れている。
- ④ 法制度とは普遍的なものであり、そこに忤意性はないはずだが、「アメリカ人」を名のった人びとは、自分たちの法制度の忤意性を強く自覚していた。
- ⑤ アメリカがアメリカと名づけられるまで、そこには文化的なものがほとんど存在していなかったのだから、「アメリカの先史時代」という表現を用いるべきではない。

Ⅱ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

組織は英語でオーガニゼーションと言います。この言葉は有機体（オーガニズム）という言葉とつながっています。また器官（オーガン）とも語源が一緒です。

つまり組織とは、小さい密な関係をもつものがいっぱい集まって大きなまとまりをつくる、そういう様態を指す言葉なのです。組織をつくって、はじめて訂正する力は開かれたものになります。「じつは……だった」という発見が他者と共有できるものになり、集団のアイデンティティがダイナミズムを帯びるようになります。

A 組織という言葉はいまの思想界では評判が悪いようです。

1970年代に強い影響力をもったフランスの哲学者、ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリの二人組は、人間のつながりは「器官なき身体」になるべきだと述べたことがあります。全体の管理がなく、個体が個体のまま、アドホックに集まっては別れ、別れては集まるような「組織なき運動」が理想だと述べたわけです。

そのような「組織なき運動」の理想は、ネット時代に入って世界中で実践されることになりました。SNSを使った動員のことです。わかりやすいキャッチフレーズを拡散し、**a** に人々を動員する。参加資格は問わないし、イデオロギーも定めない。あえて組織をつくらない。けれどもぼくはそのような方法論に否定的でした。なぜなら、そういう運動は持続しないからです。

なぜそうなるのか。それは、そのような運動には「じつは……だった」という再定義が生じないからです。訂正する力が宿らない。

訂正する力を宿すためには持続的な組織が必要です。あるていどの数の人々を顧客にし、金のやりとりをし、しかし同時に親密な関係を守ろうとするからこそ、「じつはぼくたちがやるべきだったのは……なのではないか」という反省が働く。これでは儲からない、これではひとがついてこないという試行錯誤をすることができる。

訂正するひとの共同体が信者の共同体に墮落することを避け、訂正する力をきちんと守るためには、「じつは……だった」の発見で再定義され続けるような組織をつくること、あるいはそのような組織のなかにいることが必要です。

少し別の角度から考えてみましょう。社会学では親密圏と公共圏という対立で世の中を捉えます。その対立に強引にあてはめるならば、訂正するひとの共同体は「親密な公共圏」とでも言える **b** な存在です。

社会はそんな親密な公共圏がたくさんあるほうが豊かになります。『社会契約論』を書き、フランス革命に影響を与えたことで知られる18世紀の思想家、ジャン＝ジャック・ルソーは、『演劇についてのドラランベール氏への手紙』という文章を残しています。

ルソーはそこで演劇を否定しています。なぜ否定しなければいけなかったか。じつはこれはいまでも刺激的な議論です。

ルソーはジュネーブの出身です。ジュネーブはいまではスイスの一都市ですが、当時は小さな独立国家でした。カルヴァンが16世紀に宗教改革を始めた街で、プロテスタントの長い伝統があり、^⑦誇りがありました。そのなかで演劇が禁止されていました。

ところが他方、当時はフランスでは演劇が^①花盛りでした。そしてそのような新しい芸術の台頭は啓蒙主義と密接に結びついていました。だから、ジュネーブのなかで、貧しい保守層はどちらかというと演劇否定で、リベラルな上流階級は演劇の導入を主張する。まずはそういう対立関係がありました。そしてそのうえで、ダランベールというフランス人の啓蒙思想家が、「ジュネーブはいい街だが、劇場がないのが^⑦退屈なので劇場をつくったほうがいい」という文章を発表しました。それにルソーが激怒したのです。

つまり、現代風に言えば、保守対リベラル、ローカル対グローバルという対立が、演劇導入の是非として議論されていたわけです。そこでルソーは断固としてジュネーブの側に立った。「おれたちの街を潰すな」と。

なぜ反対したのでしょうか。ルソーは、劇場をつくるには金がかかるし、劇場ができると人々は虚飾に染まり社交ばかりするようになる、それがいいないと記しています。でもそれだけでもありません。

ルソーによれば、当時のジュネーブには、セルクルという寄合がたくさんあったそうです。日本語版の全集だとカタカナで「セルクル」とそのまま書かれています。英語だとサークルとなります。

男性が12人から15人ぐらい集まって、遊んだりピクニックに行ったりする。奥さんも奥さんと集まる。小さな町内会みたいなものでしょうか。それが当時のジュネーブにはたくさんあって、統治の基礎にもなっていた。ルソーはじつは、演劇はこのセルクルを壊すからまずいと言っているのです。

これは今日にも通じる話だと思います。当時の演劇は、それまでのものと比較して巨大な新手の娯楽産業でした。それが外国から入ってくる。そうすると、みなのがんがえにその娯楽に集中してしまう。それまで存在していた小さな交流が壊れて、演劇の話しかなくなる。ルソーはその可能性を憂えています。

いままさに同じことが起きています。みんなYouTubeの話しかしない。^(注2)ツイッターしか見ていない。親密な公共圏が壊れている。訂正する力を機能させるためには、もういちどそれを立てなおす必要があるのです。

さきほど述べたように、組織という言葉はいまは好かれません。閉鎖的というイメージがあるのだと思います。

けれどもぼくは、ある集団について閉鎖的か開放的かといった区別を立てること自体が、そもそもナンセンスではないかと感じています。

たとえば家族について考えてみてください。家族というものは、**c**にすぐく閉じた集団だと思われる。家族の圧力から逃れたいというひと**x**もたくさんいる。けれども、実際にはひとつの家族のなかには必ず年齢の多様性があり、またジェンダーの多様性もあります。男子校や女子校の同じ学

年だけの集団などよりも、はるかに開かれていると言えなくもない。

では学生の集団は閉鎖的なのか。部活について考えてみましょう。同じ年代の同じ性別の人間が、みんな揃って同じ野球やサッカーをやっている。閉じているようにしか見えない。けれどもそのような集団においても、メンバーの家族構成や経済的環境に注目すれば多様性が見えてくるはずだ。

逆に、開かれて多様な関係を^①標榜しているけれど、実際はとても閉鎖的で**d**という例もあります。わかりやすいのは、いわゆる「リベラル村」の問題です。

2017年にノーベル文学賞を受賞した小説家のカズオ・イシグロ氏は、2021年のインタビューで、リベラルなインテリは世界中を飛び回って**e**なふりをしているけど、じつはどこへ行っても似た階層のひとつしか会わず、同じような話題しか話していない、もっと身近なひとを深く知ったほうが良いと話しています。ネットでかなり話題になったので、ご存じの読者もいるかもしれません。

ぼくも数は少ないながら、国際会議に出席したり、海外の大学に呼ばれて講演をしたりしたことがあるのですが、この意見には完全に賛成です。インテリがインテリと会って話す内容は、国境を越えても驚くほど同じです。開かれた社会を要求しているはずのリベラルが、じつはもつとも閉じている。

だからぼくは、ある集団の質を、閉鎖的か開放的か、多様性があるかないかといった基準で判断するのを本質的だと思いません。むしろ、そのなかで「じつは……だった」という訂正の力が働いているかどうか、つまり、^cひとが固有名で見られているかどうかのほうが重要だと考えています。

相手を固有名で見るとするのは、相手を交換可能な存在だと考えないということです。自分の予想から外れるところがあっても、すぐ失望して離れるのではなく、「じつは……だった」の論理によって、むしろ相手のイメージを訂正して理解を深めていく。

とはいえ、固有名で接しあう関係というのはいいことばかりでもありません。たとえばみなさんに子どもがいたとする。

だれでも育児には理想を抱くでしょう。けれども実際は理想どおりにはいかない。理想からかけ離れた子どもに育つこともある。だからといって子どもを交換するわけにはいかない。むしろ子どものほうも親を選べない。そんな親子関係や家族関係で苦しんでいるひとは数多くいます。

これはまさに交換不可能性によって生じる苦しみです。だから、交換不可能な関係は人間を不自由にすることもある。家族なんて苦しいムラ社会ではない、すべてが交換可能な、ネオリベリズムが支配する都市空間で暮らしたほうがよほど楽だという意見もあるでしょう。

交換可能性と訂正可能性。すべてが交換できる世界と、なにも交換できず訂正だけができる世界。どちらがよいかは簡単には言えません。

ただ、大事なのは、人間はそのふたつの世界の往復で生きているということです。いまの世の中は、交換可能性を高めること、イコール善といった主張をするひとが多い。だめな従業員ならば解雇すればいい、いやな職場ならば辞めればいい、いやな学校ならば行かなければいい、などです。

たしかに交換の思想はひとを自由してくれます。なにかも「チェンジ」すればいいのですから。

けれども、それだけで人生を最後まで快適にすごすことができるかといえば、やはり難しいと思います。肝心のぼくたちの身体そのものが交換できな

いからです。いくら周囲の環境を交換し続けたとしても、だれもが自分自身とはずつつきあっていくしかない。自分を「チェンジ」するわけにはいかない。

言い換えれば、世の中には、交換する力だけで対応できないケースがある。そのときぼくたちを自由にしてくれるのは、**D** 訂正する力あずまひろき かないのです。

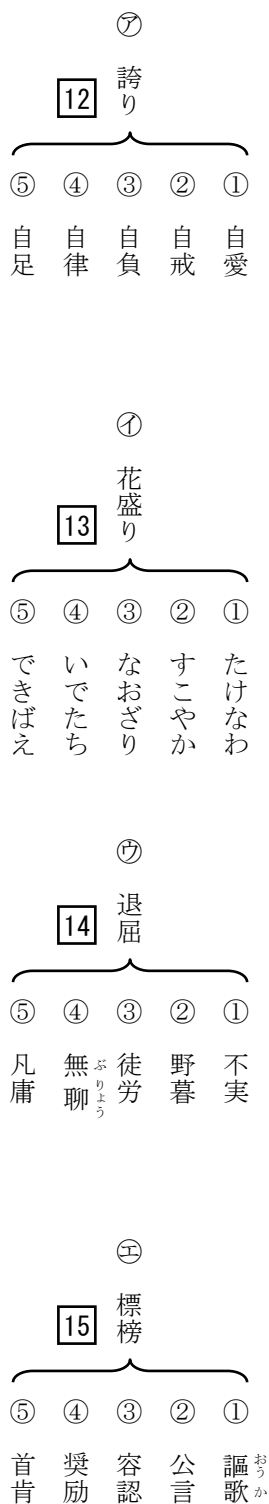
（東浩紀『訂正する力』）

（注） 1 アドホック……その場かぎり。そのためだけ。

2 ツイッター……現在の名称は「X」。

問一 傍線部⑦～⑫の言葉を言い換えたものとして最も適当なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は

⑦ | **12**、① | **13**、⑦ | **14**、⑤ | **15**。



問二 空欄 **a**、**e** に入れるのに最も適当な言葉を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。ただし、同じものを繰り返して用いてはいけません。解答番号は **a** | **16**、**b** | **17**、**c** | **18**、**d** | **19**、**e** | **20**。

- ① 両義的
- ② 一般的
- ③ 逆説的
- ④ 一時的
- ⑤ 伝統的
- ⑥ 画一的
- ⑦ 経済的
- ⑧ 国際的

問三

傍線部 A「組織という言葉はいまの思想界では評判が悪いようです」とあるが、「組織という言葉」の「評判が悪い」ことについて、筆者は本文中でどのような理由を挙げているか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は **21**。

- ① 組織という言葉には、閉鎖的なものだというイメージがつきまとうから。
- ② 組織という言葉が、その語源を理解されないままに使われているから。
- ③ 組織という言葉は、わかりやすいキャッチフレーズにはなりにくいものだから。
- ④ 組織という言葉は、親密な公共圏という概念と対立するものだから。
- ⑤ 組織という言葉には、アイデンティティなき共同体といった意味合いがあるから。

問四

傍線部 B「じつはこれはいまでも刺激的な議論です」とあるが、筆者がこのように言うのはなぜか。それを説明したものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は **22**。

- ① ルソーの残した文章は、共同体についての彼の考え方をうかがうことができるということ以上に、当時の西欧社会の状況や、そこでの新しい芸術の台頭と啓蒙主義の関係といった、きわめて興味深い問題が述べられたものだから。
- ② ルソーはフランス革命に影響を与えた人物であり、今日では一般にリベラルな思想家と考えられているが、そうしたルソーが演劇についてだけは保守的な考え方をもっていたという意外な事実が、彼の文章からうかがい知れるから。
- ③ ルソーが演劇をめぐるって交わした議論のなかには、新しい巨大な娯楽産業の台頭によって、それまで存在していた人々の小さな交流の場が破壊されていくという、当時の西欧社会に固有な現象についての記述が残されているから。
- ④ ルソーとダランベールとの間で交わされた議論からは、保守とリベラルとの対立といったことだけでなく、社会を豊かなものにしていくうえで親密な公共圏というものがいかに重要かといった、現代に通じる問題を読み取ることができるから。
- ⑤ ルソーの文章には、演劇に代表される新しい芸術の流行によってセクルルに代表される親密な共同体が失われてしまったことへの哀惜の念と、そうした共同体を取り戻すための方策が述べられており、それらの問題は現代的なものでもあるから。

問五 空欄

X

に入れるのに最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は

23。

- ① なぜなら、開放的に見える集団も、そのほとんどは閉鎖的だからです。
- ② なぜなら、ジェンターの多様性というものがある以上、どんな集団も開放的だからです。
- ③ なぜなら、集団に閉鎖性や開放性といった特質を見出すことは不可能だからです。
- ④ なぜなら、そうした区別は現代日本の社会に特有なものでしかないからです。
- ⑤ なぜなら、そんな判断は状況や視点によっていくらでも変わるからです。

問六

傍線部C「ひとが固有名で見られているかどうかのほうが重要だ」とあるが、筆者がこのように言うのはどうしてか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は

24。

- ①ひとや社会について考えるとき、誰もが閉鎖的か開放的かといった観点にこだわってしまうが、そうした態度に対して訂正する力が働けば、おのずとひとの固有性という問題にたどり着くから。
- ②現代において望ましい集団とは開放的で多様性をもったものであり、そうした理想的な集団は、固有性をもったひとりひとりの人間によって支えられているものだから。
- ③ひとがどのように生き、どのような社会を作っていくべきかということを考えるに際して、自分が交換不可能な身体をもった固有な存在であることを自覚することは不可欠だから。
- ④相手を固有名で見るとするのは交換不可能な存在と見るということだが、そうした見方をこえて相手を交換可能な存在と見ることでこそ、本当の意味での自由な生き方が可能になるから。
- ⑤ひとを固有で交換不可能な存在と見る考え方と、交換可能な存在と見る考え方があり、その両者の往復によって理想的な社会は形成されるが、現代人は後者の考え方を失いつつあるから。

問七

傍線部D「訂正する力」とあるが、本文の論旨によれば、「訂正する」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選
び、その番号をマークしなさい。解答番号は **25**。

- ① 豊かな社会を作り上げるために必要な親密な公共圏を維持していくうえで、あえて組織を作らず自由で流動的な人間同士の結びつきを模索し、そうした柔軟な関係のなかで個々人が自らのあり方を反省していくこと。
- ② いやなものや気に入らないものは交換してしまえばよいと考えていた従来のあり方に反省を加え、そうした交換によつては対応できない現実もあるということ素直に認めながら、自らの生き方を修正していくこととすること。
- ③ 同じような考え方をもつひとと会って同じような話しかしないといった態度を改め、固有性をもった身近なひととより深く話し合っていくことを通じて、自らの知見を深め、自由な生き方を手に入れていくということ。
- ④ 持続的な組織やそのなかで生きる個々人が、その組織や人生をよりよいものにしていくために、すでにしてしまった行為について真摯に反省を加え、試行錯誤を行いながら、自らのあり方を再定義していくこととすること。
- ⑤ 閉鎖的なのか開放的なのか、保守なのかリベラルなのかといった対立がいかに無意味なことかをあらためて省み、そうした相対立する立場を融合させた新たな立場を作り出せるように、日々尽力していくこと。

2024 年度 マネジメント 一般A 国語 解答

大問	小問	細分	正解	配点	大問	小問	細分	正解	配点
I	問一	1	③	2点	II	問一	12	③	2点
		2	②	2点			13	①	2点
		3	①	2点			14	④	2点
		4	⑤	2点			15	②	2点
		5	②	2点		問二	16	④	2点
	問二	6	④	6点			17	①	2点
	問三	7	⑤	7点			18	②	2点
	問四	8	②	7点			19	⑥	2点
	問五	9	①	7点			20	⑧	2点
	問六	10	②	6点		問三	21	①	6点
	問七	11	③	7点		問四	22	④	7点
						問五	23	⑤	5点
						問六	24	③	7点
						問七	25	④	7点